

## 主 題：クリスチャンの四大特権

聖書箇所：ピリピ人への手紙 4章 4-7節、10-13節

最初にご了解いただきたいのですが、私は脳梗塞を二回やって顔の半分が麻痺しています。左側も弱いものですから発音がはっきりしません。できるだけゆっくり話し、また、聞き取りにくいと思われる時は同じことを二回話すことがありますのでご理解ください。また、頸動脈が詰まっている関係で長い時間立っていることが難しく、姿勢が悪くなるかもしれませんが、失礼にならないようにしますので宜しくお願いします。

今日はクリスチャンの四つの大きな特権についてピリピ書から学びたいと思います。まず、ピリピ4章4-7節と10-13節を読みましょう。

「4:4 いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。:5 あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。:6 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」

「4:10 私のことを心配してくれるあなたがたの心が、このたびついによみがえって来たことを、私は主にあって非常に喜びました。あなたがたは心にかけてはいたのですが、機会がなかったのです。:11 乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。:12 私は、貧しさの中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。:13 私は、私を強くくださる方によって、どんなことでもできるのです。」

クリスチャンに与えられている四つの特権を学ぶのですが、その前にピリピ書について復習したいと思います。ご存じのように、この書簡はパウロが書きました。時代は紀元61年の終わり頃、別の本によると62年とも言われますが、61年から62年頃に書かれました。今から約二千年弱前に書かれた書簡です。書かれた場所は、私はローマの牢獄だとばかり思っていました。学説によると三か所あって、一つはローマ、また、カイザリヤ、エペソと言われますが、聖書注解ではローマの牢獄で書いたとありますから、そう考えるのが一番自然だと思います。三つの説はありますが、ローマの獄中書簡であることを前提に話したいと思います。ピリピ書が書かれた目的は、一つは、ピリピの教会はパウロが導いた教会ですから、ピリピの教会からパウロ宛に贈り物をしています。それに対する礼状を書くこと。もう一つは、ピリピの教会にはいろいろな問題がありました。教会内の不一致の問題、そして、偽のユダヤ主義者の危険、また、完全主義者の危険、あるいは、偽教師の危険がありました。だから、これらに対する指示とアドバイスをしているのです。

パウロはこのピリピ書においてクリスチャンのいろんな特権を述べているのですが、この特権はキリスト・イエスを自分の救い主と信じたクリスチャンであれば、だれにでも与えられているすばらしいものだと思います。まだ、イエス・キリストを信じてない人には与えられていない特権です。

## ☆クリスチャンの特権

## 1. どんな時でも喜びを持っている 4:4-5

4節「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」、ピリピ書は1章から4章までのたった四つの章しかありません。しかし、その中で「喜ぶ」ということばを16回も使っています。パウロは「喜ぶ」ということを強調していることが分かります。パウロはこれをローマの獄中で書いています。ご存じのように「獄中書簡」と言われていますが、獄中書簡は四つあります。エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、ピレモン書、この四つを総称して獄中書簡と言っています。

彼は捕えられて自由に外に出られません。そして、彼は苦痛と辱めの中にいるのです。クリスチャンであればこのパウロを知らない人はいないと言うほど、異邦人伝道の第一人者です。新約聖書27巻の中の半分以上、14巻をパウロが書いています。これらは大体同じ時期に書かれています。それ程すばらしい伝道者です。彼は捕えられていつ処刑になるか分からない状態で牢の中にいるのですが、早く自由の身になって、多くの人に福音を宣べ伝えたいと思っていたことでしょう。

Ⅱテモテ2:9で「私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれてはいません。」と言っています。ですから、「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」とはクリスチャンでなければ言えないと思います。例えば、すべてが順調にい

き健康であれば「喜びなさい」と言えるかもしれませんが。しかし、仕事が上手くいかない、何かに行き詰まって失敗した、しかも、病気で苦しんでいる人に対して、「喜びなさい」と言えるでしょうか？これは言えないと思います。なぜなら、世にある喜びというものは、良いことがなければ喜べません。ですから、獄中でいつ処刑されるかも分からない状態にいる訳ですから、普通は喜びはない状態です。でも、クリスチャンの喜びは、外面や環境とは関係ないのです。内面的なものです。世の中の人の喜びというのは、肉体的、物質的な外面的なものです。けれども、本当の喜びは、どのようなことがあってもなくなる喜びです。世の喜びはそうではないのです。

ご存じのように、ダビデという王様がいました。彼は先ほど読まれた詩篇32篇を書いています。彼は紀元前千年頃のイスラエルの王でした。旧約聖書、Ⅱサムエル記11章に記されている記事ですが、ある夕暮れ時、屋上を歩いていたダビデは、美人で人妻であるバテ・シェバが水浴びをしているのを見て一目惚れしたのでしょう。自分のところに招き入れ不倫の上、子どもができました。バテ・シェバの夫は兵士でウリヤと言い、戦いに出ていました。そのウリヤを何とかしようと思い、戦地から呼び寄せていろいろと画策するのですが上手く行きません。困ってしまったダビデは戦争の一番激しい所にウリヤを送るようにさせ、そこで戦死させてしまいます。未亡人となったバテ・シェバを自分の妻として迎えるのです。聖書には書かれていませんが、私が思うには大衆は王様を賛美したと思います。「我々の王様はなんと慈悲深い方だろう。戦死した夫の未亡人を自分の妻として迎えた。何とすばらしい王だろう！！」と。彼は不道徳でした。不倫です。間接的な殺人をしています。一般の人をごまかすことはできても、神をだますことはできなかったのです。

彼は日夜悩みました。「それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。」（詩篇34：4）と告白しています。彼は神の前に悔い改めて、詩篇32：1-2でこのように言っています。「:1 幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。:2 幸いなことよ。【主】が、咎をお認めにならない人、おその霊に欺きのない人は。」。一番幸せな人、本当に変わらない喜びを持っている人は、神の前に罪が赦された人である、神との平安を得られた人が一番幸せな人だと言っています。ご存じのように、この世は偽善です。だから、外側に罪があっても隠すのです。しかし、内側に罪があると本当の喜びはないのです。だから、ありがたいことに、神がこのような罪人を愛してくださって救い主を送ってくださったのです。それがイエス・キリストです。イエス・キリストは神ではありませんでしたが、私たちを救うために天国の栄光を離れ、罪人の姿となってこの地上に来てくださり、そして、十字架の上で苦しみ尊い血を流し、死に、よみがえってくださいました。それは罪人の私たちを罪から解放するためでした。そして、今「わたしのところに來なさい。わたしが休ませてあげます。」と言ってくれるのです。

そのイエス・キリストを自分の救い主として信じる時、イエスは「あなたの罪は赦された」と言ってくれるのです。私たちはもはや神の前にさばきを受けることなく、今晚死んでも天国に行けるといいうすばらしい喜びがあるのです。どのような困難があっても、この与えられた喜びと希望はなくなりません。4節で「いつも主にあって喜びなさい」とパウロが言ったように、どんな時でも失わない喜びを持っているのです。これがキリスト者のすばらしい特権です。好きなことが何でもできるという人でも、「あなたのいのちは今日なくなります」と言われたらこのようなことが言えるのでしょうか？言えないと思います。このキリストのいのちは死に打ち勝ったものであり、キリストが私たちに与えた平安はこの世のものではなく、動かされない喜びがあります。ですから、どんな時にでも喜ぶことができるという特権が与えられているのです。

ここで私のプライベートなことを少しお話しします。私の体験は皆さんには余りないことだと思うのでお話ししたいと思います。ご存じのように、私は何年か前に癌になりました。初めは結腸癌でした。30センチほど切りましたが、何年かすると直腸癌、また何年かすると、転移性の肝臓癌と本当にしつこいです。肝臓を切る時に、手術の前夜に医師から「宮本さん、明日手術しますが、上手くいくかどうか分かりません。上手くいっても残り2年しか生きられません。」と言われました。その時、旧約聖書を見ると、同じようなケースがありました。ヒゼキヤという王様がいます。列王記第二20章に記されていますが、ヒゼキア王は神から「あなたの病気は治らない。あなたは死ぬ。」と言われたのです。その時ヒゼキヤは「大声で泣いた。」（20：3）とあります。普通の人ならそうかもしれません。私の場合は、先ほどから偉そうに「喜びなさい」と言っていますが、全く平静であったことは言えません。でも、比較的平静であったことは確かです。そして、看護婦さんから「眠れないでしょうから睡眠薬を飲んでください。」と言われたのですが、私は「結構です」と答えて、その夜もゆっくり眠れました。後で考えて、クリスチャンにして頂いて良かったと思いました。そのような経験があります。

## 2. どんなことでも思い煩わない 4 : 6-7

6-7節「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」。この世は悩みの世です。思い煩いは一杯あります。肉体的、精神的、また、経済的な悩み、子どものことの悩みなどいろいろあります。しかし、私たちは偽善で、人に会うと悩みがあっても何でもないように振る舞う訳です。外面的には何も心配がないようにしていますが、心の中は心配事で一杯なのです。イエス・キリストは私たちの恐れや重荷を任せられるお方です。だから、聖書の中には何度も「思い煩う必要はありません」と言われています。

I ペテロ5 : 7を見てください。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。」とあります。ご存じのように、子どもは親といっしょにいると心配や恐れはないものです。子どもは親が自分を顧みてくれることを知っているから、どんなことがあっても心配しません。私たちはどうして心配するのでしょうか？一切を委ねることができることを知らないからだと思います。神があなたのことを顧みてくださっていて、あなたの重荷を委ねることができるのに委ねないからです。私たちは教会に行っていると言っても、時々、クリスチャンらしく歩んでいない時があると思います。神が私たちを顧みてくださっているのに、自分ひとりであるように思ってしまうのではないですか？キリストが心配してくださっているのに、自分でくよくよ考えてしまうのです。私たちは愚かな親であって子どもの心配をしますが、神は私たちが心配する前にしてくださっているのです。私たちが神の子であるなら、私たちが心配するより先に神が気付いて、そして、今、私たちに何が必要かを神は知って、万事を益としてくださるのです。

イエス・キリストは言われました。マタイ6 : 26「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。」、また、同じマタイ10 : 29には「二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。」、ここに書かれている一アサリオンとは1デナリの16分の1です。ローマの銅貨ですが、1デナリというのは一日の賃金です。その16分の1以下の銅貨です。雀は本当に安いものです。また、どこにもいます。私は老人ホームの4階に住んでいますが、毎日雀が来ます。その雀一羽でも神が目を留めておられるのです。その次の30節には「また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。」とあります。今、ここにいる私たちは財布の中にくらあるかを知っていたとしても、髪の毛一本一本を数えて何本あるかと言える人は全くいません。でも、神はちゃんと知っておられると言うのです。ですから、神はそのように小さなものにも目を留めてくださるのです。

神はこのように私たちを顧みてくださっているのに、自分ひとりで心配してくよくよ考えて、神に任せないで一人で歩いているのです。私たちが罪人であった時、神を無視して歩いていたのですが、神はいつも私たちを忘れたことはなく、あのルカの福音書に書かれているように、私たちを失われた小羊に例えて、探して見つかった時には大喜びで肩に乗せて帰ったほどのすばらしい愛のお方です。そのキリストが私たちを忘れるはずはないと思います。実際に、私たちはちりあくたのように小さなことをくよくよ考えて、神に委ねないで疲れてしまうのです。

先日、ある本を読んでいたら「一切の思い煩いを神に委ねるということは謙遜の結果である。」と書いてありました。ペテロの手紙第一に「みな互いに謙遜を身に着けなさい。」(5 : 5)とありますが、一切の思い煩いを神に委ねるということは、やはり、謙遜の結果である、なるほどと感じました。

## 3. どんな環境でも満足できる 4 : 11-12

11-12節「乏しいからこう言うわけではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。:12 私は、貧しさの中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」。この世は満足すべきものがないと満足できない、喜ぶべきものがないと喜べないでしょう。しかし、キリストの与える喜びは内側に与えられるものですから、外的な境遇とは関係ないものです。普通、苦しい環境の中に生きてると不平や不満が出て来ますが、これは自然なことです。いい環境に置かれると喜びやすばらしいことばが出て来る、これは当たり前のことです。キリストを心に受け入れていない人は、苦しい環境にあると不満のことばが出て当たり前です。ところが、キリストを心に受け入れた時、どんな境遇にあっても満ち足りるという新しい恵みがあるのです。パウロはこの12節でキリストにある人は「あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」と言いました。例えば、お金持ちの人が貧乏のどん底になるとおろおろしてしまっていてどうしていいのかわかりません。また反対に、貧かしかった人が急に富んでし

まうと、その富をどうコントロールしていいのかわからないのです。しかし、このパウロはどんな環境にも対処する秘訣を心得ていると言っているのです。

世の中の人々は世の富によって生きようとします。しかし、イエスはこのように言われました。有名なことばです。マタイ 4:4 「イエスは答えて言われた。「『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある。」。私たちが生きていくのはパンだけではありません。もちろん、パンは大事ですが物質だけではないのです。神のおことばにあって生かされているのです。私たちが霊的に満たされると、この世の富の大小は関係ないのです。どんなことが周りに起ころうとも関係がないのです。

#### 4. どんなことでも出来る 4:13

13節でパウロは「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」と言っています。もし、彼が条件によって幸せを得ようとしている人であるなら、こんなことは決して言えません。ピリピ 4:5に「あなたがたの寛容な心を、すべての人に知らせなさい。主は近いのです。」とありますが、「近い」ということは二通りの理解が出来ます。一つは「再臨が近い」です。マタイ 24:33に「そのように、これらのことすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。」とあります。もう一つは「主が近くにおられる」ということです。詩篇 119:151「しかし、【主】よ。あなたは私に近くおられます。あなたの仰せはことごとくまことです。」。このように二つの理解がありますが、キリストの心が私たちの心から離れることはないのです。「私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできる」とパウロは言っています。どの人にもその人生には計画があります。しかし、その計画通りにいきません。しかし、キリストにある永遠のいのちは聖書に書かれている約束通りに与えられています。

「私たちはキリストのもの」、また、「キリストは私たちのもの」と言われています。Iコリント 3:23「そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のものです。」、私たちのような貧しい者がキリストのものだと言われているのです。私たちは貧しくても我が子には出来ることは全部してやりたいと思います。キリストは自分のいのちさえも私たちに与えてくださった愛の方です。ですから、キリストとともに歩んでいる者はすべてキリストのものなのです。そうであれば何一つくよくよすることはないと思うのです。「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」

今日はクリスチャンに与えられている四つの特権について学びました。一つは「いつも喜んでいること」、もう一つは「何事にも思い煩わないこと」、また、「どんな境遇でも満足すること」、そして、「私を強くしてくださる方によって何でも出来ること」と、この四つの特権をがいっしょに見ました。